



北の地に

夢を追いかけた人

～幕末維新の貿易商・久富与平～



高龍寺門前（函館市）

7月初旬、北海道函館市へ出かけました。目的は明治初期、有田出身の久富与平（子藻）が乗船していた大木丸が北海道千島沖で難破し、漂流ののち釧路厚岸海岸で死去し、遺骸は函館市内に埋葬されたという、その終焉の地などを調査することでした。

この久富与平という人物について少し説明しますと、天保3年（1832）有田皿山の中の原に、父久富与次兵衛昌常、母鶴の六男として生まれました。父の跡を継いだ長兄与次兵衛昌保に後継ぎがいなかったため、兄の養子となって久富宗家を継ぎました。

久富家は天保13年ごろ、佐賀藩より許しを得て、海外輸出を開始したといわれています。そのころ、十代佐賀藩主鍋島直正より「蔵春亭」という屋号を下賜されました。

当時の久富商店・蔵春亭の支店が長崎大村町にあって、ここには、のちに明治新政府の要人となった大隈重信や副島種臣、江藤新平らが出入りしたといわれています。

ところで、町内・稗古場の報恩寺境内に石造のクジラの碑があるのをご存知でしょうか。久富家の子孫によって昭和7年11月に建立された「久富子藻之碑」です。碑文は恩師の谷口藍田によるものです。

新しい時代を迎え、五大州を回ることを夢見てい

たと与平でしたが、志半ばで夢破れてしまい、遠く北の地での臨終に際し「我死せば屍を海中に投ぜよ」と言った彼は、死後はクジラに乗ってその初志を遂げたいという思いが有田に伝えられました。

しかしながら、周囲の人々は彼を海に流すことに忍びなく、函館の小島武八家で行われた葬儀で導師を務めたのが高龍寺十八世国下海雲師で、その後、地藏堂に葬られたと記録にあります。

高龍寺の墓地内に葬られたのではないかと思います、まずはそちらを訪ねましたが、函館市内は過去数度の大火に見舞われ、寺自体が転居していることもあり、また過去帳からも探してもらったのですが、墓碑を見つけることはできませんでした。

慶応3年（1867）のパリ万国博覧会には、同じく長崎にあった田代商店と久富商店の焼き物を大量に出品したことも記録がありますが、これらも与平らが有田から長崎へ運んで取引しようと思っていた商品だと思われれます。

北を目指した与平の視線の先には、さらに広い世界があったのでしょうか。のちに、交流のあった大隈重信は「三菱以上の事業をなしとげただろう」とその早世を惜しんだといわれています。



久富与平に関しては「わが家の歴史」（久富二六著）、「おんなの有田皿山さんぽ史」にあります。長崎の久富商店跡に関しては「万才町遺跡～長崎県庁新別館建替えに伴う発掘調査報告書」に久富家の製品などが掲載されています。

皿 季刊 山

No.83

秋

2009

有田町歴史民俗資料館・館報

お知らせ

平成 21 年度企画展 「海揚りの有田焼～筑前岡垣浜を中心に」

今年の企画展は、福岡県遠賀郡岡垣町在住の添田征止さんが約 30 年間、近くの岡垣浜（三里松原海岸）にうちあげられた江戸時代の有田焼などの陶片を採集されていますが、それらをお借りして展示します。

岡垣町の添田家を訪れると、まるで「陶片の館」といった様相で、長年に亘ってほぼ毎日のように海辺で採集された陶片などが、所狭しと収納されています。一部は家の中には収まりきれずに、屋外に保存されているものもあります。ここまで添田さんがのめり込むきっかけは何だったのか、なぜ海揚りの陶片などを集めようと思いついたのでしょうか。

今回は添田さんのロマンとモノに、有田の歴史を重ねてみたいと思っています。

《芦屋商人》

江戸時代の有田焼（伊万里焼）を全国に売りさばいた商人として、紀州箕島や筑前芦屋の商人のほかに長州・下松や出雲や石州、遠くは越中・富山の商人も伊万里津へやってきています。

とくに江戸後期の筑前商人の活躍はいちじるしく、「伊万里歳時記」によれば天保年間に伊万里津から積み出された約 31 万俵の内 20 万俵が筑前の商人が取り扱ったといわれます。神社の鳥居などに商人の名前が刻まれていることからわかりますし、最近発見された成富皿山代官の私的な日記によれば、各地からやってきた商人が 15 日から長いものでは 100 日も滞在願いを出して、その間どのような日々を過ごしていたのか、興味をそそられます。

取引を終えた商人が伊万里津を出港し、目的地に着く前に船が遭難して岡垣浜沖に沈没し、それらが海岸へ打ち上げられたのが、「海揚りの有田焼」です。

《採集の経緯》

昭和 13 年（1938）4 月、福岡県田川郡糸田町に生まれた添田さんは、幼い時から好奇心旺盛で、いろんなものに興味を持ち、それに向かってひた走る性格だったそうです。実際に、家の中には自筆の大きな絵画や、さまざまな工具有り、海岸で陶磁器を拾い出すための道具も手作りされていました。

昭和 53 年（1978）の夏ごろ、朝日新聞の記事に「三里松原射爆場を開放」とあるのを見つけ、当時住んでいた北九州市八幡西区折尾からバイクで駆けつけて海岸を歩き、そこで砂に埋まった小鉢（完形品）と出会いました。

「どこの国の焼き物か、いつの時代に焼かれたものか、どうしてこの海岸に」という疑問にかられ、辺りを見回すと多数の陶磁器片が見つかり、それがきっかけとなり、休日は頻りに海岸を訪れるようになったということです。

《採集品》

添田さんが採集したものは皿、碗、小杯、仏飯器など日常の有田焼以外に、波佐見焼や周辺の産地で生産されたと思われる陶器のすり鉢や皿などもあります。

また、段重や碗などはほぼ完形に近いものも収集され、生活用具の一つである戸車や化粧道具の紅皿なども多くあります。



採集品の一部

今年の企画展では岡垣浜に揚がった陶磁器を中心に展示しますが、来年度はこれをさらに国内全域に範囲を広げて、江戸時代の有田焼が広く普及していった跡を紹介したいと考えています。そのイベント的な企画展ですが、多くの町民の方に観覧いただきたいと思っておりますので、秋の一日、周囲の紅葉とともに楽しんでください。

- ・ 期 間
平成 21 年 11 月 1 日（日）
～ 11 月 30 日（月）
- ・ 場 所
泉山 有田町歴史民俗資料館東館
- ・ 入館料 無料

十八夜祭

～真夏の夜のページェント～



境内での熱のこもった演奏

6月の田植えが終わり、暑い最中での草取りや、水管理に忙しいころ、農村部では豊作祈願のため夏祭りが縁日に行われます。縁日とは、神仏の降誕・示現・誓願などの縁(ゆかり)のある日を選んで、祭祀や供養が行われる日であり、この日に参詣すると、普段以上の御利益があると信じられています。

有田町で最も人の出が多い夏祭りが、竜泉寺を中心として大木宿で行われる十八夜祭で、毎年8月18日に行われます。毎月18日は、竜泉寺の本尊である聖観音の縁日なので、この日に行われます。

十八夜祭は、大木宿に住む15歳から45歳までの男性で構成される十八夜会が取り仕切ります。当日は朝早くから頭領(今回は福田和弘氏)の指揮で祭りの準備が行われます。仕掛け花火や道花火などは、すべて手作りするのが習わしです。この他にも、集落入口に御仏燈の門柱をつくったり、食事等の準備「しっかた(汁方)」をしたりします。会員の年齢は、昔は15歳から30歳まででしたが、若い男性が少なくなり現在の構成になりました。

夕闇が迫り、家々の玄関先にかけた御仏燈の提灯に灯りが点されるころ、大木宿の一角から大木浮立保存会による打ち込みが始まり、集落内を練り歩きます。これを道行といいます。竜泉寺の境内に入ると、浮立の演奏も一段と熱が入ります。やがて、一番鉦を巡って、二手に分かれた若者たちが鉦の争奪をはじめます。鉦を守る者と、奪おうとする者が激しくぶつかり合う「ドテマカショ」が行われ、若者たちをあおるように水がかけられます。昔は、熱くなってしまう、本当の喧嘩になることもあったそうです。

仕掛け花火が披露され、クライマックスの「ジャーマン」に移ります。これは太い柱に枝を付け、さらに

その先に回転する仕掛けを取り付けた特殊な花火です。着火すると火の推力で枝が回転し、大きな火の輪ができます。そして十八夜祭は幕を閉じます。

さて、この祭りで重要なのが浮立です。この芸能は、江戸時代の万治年間(1658～1661)に有田郷が大干ばつに見舞われたとき、竜泉寺の中興の祖と言われる尊映が7日間雨乞いの儀式を行い、水と雨を司る龍神を供養し、郷民そろって大里村の海辺(現在の伊万里市二里町川東地区の高台で、当時は海岸でした)で浮立を行ったところ、その5日後に大雨が降り、豊作となりました。

これが起源となり、以後干ばつになれば、浮立を行って雨乞いをするようになったそうです。このことは、佐世保市黒髪町木場浮立に伝わる「雨請浮立之略記」という巻物に記述してあります。その最後に「有田郷竜泉寺 元禄三年九月吉日 法印頼算」とあり、この巻物が竜泉寺から与えられたものであることがわかりますが、実は後年に写されたものであると考えられています。

「雨請浮立之略記」には他に、浮立の形体や技術を記録してあります。これら竜泉寺を起源とする浮立は、現在では、「竜泉寺系浮立」と呼ばれ、北松浦半島一帯、佐世保市、伊万里市西部など広く伝わっています。

雨乞い浮立＝十八夜祭は、作物を実らせる雨を龍神に乞い、豊作を祈願する郷民挙げての祈りのイベントでした。現在は唯一ここでしか見られないジャーマンや、その後の打ち上げ花火など華やかな演出に目を奪われがちですが、その始まりは生きるための必死の祈りだったことを思いながら、来年の8月18日の夏の一夜を過ごしてみたいかがでしょうか。

(宮崎 光明)



上：浮立は笛に始まり
笛に終わる
下：浮立の華「太鼓」

東京の中の 佐賀・有田(麻布賢崇寺)

過日、東京麻布にある賢崇寺に行ってきました。この寺は代々、佐賀鍋島家の菩提寺だったところです。境内には藩主やその家族の立派な墓碑があり、周囲には、佐賀出身の人々の墓碑も多くあります。

明治6年のウィーン万博に参加し、その後、起立工商会社という貿易会社を経営した松尾儀助の墓碑の周りには、同社社員の八戸欣三郎、執行弘道等も眠っています。彼らは明治14年、米国ボストンの陶磁器商人アーサー・フレンチが来日して有田に40日ほど滞在した折、肉や牛乳といった当時の日本人はあまり口にすることのなかった食物を、わざわざ佐賀から有田へ運びました。それを料理し家族総出でもてなしたのが、大樽の手塚亀之助一家でした。

また、明治期の香蘭社や精磁会社に、物心両面から惜しみない援助をした久米邦武一家の墓碑もあります。

六本木のニュータウン近くに位置する賢崇寺ですが、都会の喧騒がうそのような、静かな空間です。日本の近代化に一役買った人々は昨今の状況をどのように見ているのでしょうか。



久米邦武とその妻淑子の墓碑

有田の町屋模型教室 開催

8月10日(月)～11日(火)にかけて、第8回模型教室を開催しました。町内の小学校5・6年生によびかけたところ、12人の応募がありました。

今回も現在有田町で進めている町並み保存のことや有田の歴史について話を聞き、2日間にかけて、思い思いの町屋を作っていました。

この模型教室を通じて、有田の素晴らしい宝である伝統的な町並みに誇りを持ち、大切にすることをほぐんでほしいと願っています。

今回の参加者

< 有田小学校 >

松尾和季くん、藤井健伍くん

< 有田中部小学校 >

永田雄暉くん、石橋大樹くん、南伊織くん、
野中涼平くん、安永弘介くん、太田圭亮くん、
中尾大雅くん、中村瑠輝くん、島田有理さん

< 大山小学校 >

樋渡里菜子さん

時を切り抜く



明治44年 牧地区の耕地整理(西岡家蔵)



作業中の子どもたちと町屋の模型

季刊『皿山』

通巻83号(平成21年9月1日)

編集・発行 有田町歴史民俗資料館

〒844-0001 佐賀県西松浦郡有田町泉山1丁目4-1

☎0955-43-2678 FAX0955-43-4185